


第200話 俳諧⑬ 俳諧歌枕と俳諧発句 その3  中山町 歴史散策

元禄2年（1689年）に芭蕉が「おくのほそ道」紀行の後、近畿一円を巡った折、大津の無名庵の俳諧で、各務支考が門人となりました。その頃の支考は、若干26歳の少壮俳人で、翌元禄4年（1691年）、芭蕉に従って江戸に出て、以降、芭蕉の後継者となりました。元禄5年（1692年）、芭蕉の足跡を追って、松島、象潟を巡る途中、鶴岡の永山重行家に泊まっていることから、その時俳諧が催されたのであろうと考えられます。

このように、鶴岡を中心に蕉風俳諧が定着した20年ほど後の享保年間に、深沢嵐七が美濃の支考こと蓮二坊のもとを訪れました。嵐七は近江商人深沢与惣兵衛の子で、鶴岡荒町の住人でありましたが、二見の文台（本をのせる台に、扇の絵に梅の枝と、扇外に二見ヶ浦の夫婦岩が描かれた桐板造りのもの。一国一脚の定めがあつて、宗匠の位の認定を証するもの）と文書を与えられています。

また、少し遅れて、林風草は、伊勢参拜に出た享保13年（1728年）の夏、蓮二坊を訪れて、

服部文右衛門家の「俳諧歌枕」の序文をいただきました。

林風草も「二見の文台」と「三頼の軸」を受けていますが、嵐七のものは火災で焼失、林風草のものは出羽国一円の高弟、上山の万嶽まんがくに送られたといわれています。

では、この「俳諧歌枕」がなぜ文新田の服部文右衛門家に残されたのでしょうか。これについては、後書きにある「梨本甚蔵」なる人物を見ていく必要があるようです。

【用語の説明】

少壮・年の若いこと。一般的には20歳〜30歳ぐらいまでの年齢をいう。

蕉風俳諧・俳諧で、松尾芭蕉およびその門流の俳風をいう俳諧史的な呼称。

万嶽・金子万嶽。上山に生まれる。俳諧師として古調庵万嶽と称す。

※引用…中山町史 中巻

第10章第3節  
文芸と美術工芸から

私たち地域おこし協力隊です！ No.66 

みなさん、ごきげんよう～。地域おこし協力隊コラムの奇数の月を阿部美恵子が担当します。

1月に開催した『地域おこし協力隊活動報告会』に参加された方々にお会いすると温かいお言葉をかけていただくようになり、顔を覚えていただけて嬉しいです。「今までに、かぶくんが好きって言う大人に会ったことないわ」「かぶくん好きって変わってるね」と、かぶくんネタで会話が始まります。

私が移住を決めたきっかけはあの全国かぶと虫相撲大会の応援キャラクター【かぶくん】に一目ぼれしたからです。町観光協会が発信しているSNSでかぶくんを見た時から可愛くって胸キュンなんです。去年の7月全国かぶと虫相撲大会に栃木県から一人で中山町に来て、会場をウロウロし、念願のかぶくとツーショット写真を撮りました。世の中でのいわゆる『推し活』に目覚めたわけですよ。暖かくなったら元気にかぶくんを追っかけたいです。かぶくんファン仲間にも会いたいな～。えっ？いるよね??

3月の毎週火曜日・10時から16時まで・『旧〇っ』を『私と地域の皆様との交流の場』として開場しておりますのでお気軽にお越しいただき、ぜひ中山町での暮らしのことや食のお話を聞かせてください。お待ちしております。



阿部美恵子  
出身地：栃木県鹿沼市  
趣味：高校野球観戦



●協力隊への問い合わせ先● ☎662-4271（総合政策課）